宮下　洋子
Hiroko Miyashita

2017－2月号

まほろば自然農園だより

1月の余市川。右側にまほろば自然農園がある

『サピエンス全史』という本を紹介して下さった方が、主人と私の新年の挨拶を読まれ、次のようなメールを下さいました。

「資本主義（複利・搾取）が農業から生まれていること。農業はあくまで換金作物を生産する産業であり、貨幣や資本主義システムに組み込まれていることをしっかり掘り下げて考える事が大切。

そこを考え抜かなければ有機農法も自然農法も慣行農法も単に生産方法の違いに過ぎない。

逆に言えば、認知革命に基づく農業革命を超克する革命に興味があります。」

大変難しい表現ですが、まったくその通りだと思います。

①　資本主義（複利・搾取）が農業から生まれていること。

について、

「えっ！本当？」と言う方の為に、その仕組みを

少し説明させて戴きたいと思います。

今、日本の縄文時代が世界の多くの分野の学者たちから注目を浴びています。

主として、**狩猟、漁労、木の実の採集生活**をしながら、1万5千～3万8千年も**定住**生活を続け、**平和に健康に暮らしていた民族**だったという事が知られるようになったからです。

これは世界的にも類例のないことで、そのシステムの秘密を探る研究が行われているところで

す。

縄文時代のもっとも特徴的な事は、農業がなかった事です。

食物は、皆で協力して捕まえたり、採集したりして平等に分けられていました。

男性の仕事であった狩猟や漁労は、**皆で協力**しなければ出来ないし、欲張って独り占めしても腐敗するので、**平等に分配**されたのでした。

食材の種類は**2,000種類**にも上り、現在よりもはるかにバリエーションに富んだ、バランスの良い食生活でした。また、主食と副食という概念もなく、栗や、どんぐりが食べられていたくらいで、**でんぷん質の全体に占める割合は、大変低い**ものでした。そして弥生人よりもはるかに健康だったというのです。(自著小冊子『人の天食とは』ーホームページ掲載ー)

『農業は人類の原罪』

ところが、大陸から多くの移住民と共に、稲作技術が入って来ると、急激に社会の仕組みが変わってしまったのです。

知恵と体力があり、多くの土地を開墾し、上手に多くの穀物を作ることの出来る男性は、穀物の貯蔵技術が発達したこともあり、それらを地域全体に分配することを止め、土地も生産物も私有するようになりました。農耕は、狩猟や漁労のように集団で協力しなくても、個人で開墾することができたからです。

この時点から私有財産というものが発生し、私有財産は格差社会を生み、身分社会や、権力構造を生み出していきました。さらに言えば、この私有財産を守る為に国家も生まれたのです。

まさに**『農業は人類の原罪』**と言われる所以です。

女性差別も生んだ農業

また、私有財産の発生と相まって女性差別も生まれる事になりました。日本の女性史の研究で有名な高群逸枝女史は、

「まだ農耕文化の発達していない太古の時代には、男性が女性のもとに通う**『通い婚』**でした。夫は複数の場合もあり、生まれた子供は、どの父親の子供か特定出来ないけれど、どの母親の子供かという事だけは確かなので、その子は母親の性を名のるという**母系制社会**でした。男性も複数の女性のもとに通うという事もあり、子供は社会全体で大切に育てられた。」

と言うのです。これは決して不道徳な事ではなく、自然の厳しい太古の時代には子孫繁栄が最も大切な事だったからです。

このことを、女性が抑圧されず大切にされ、おおらかに輝いていたという意味で、平塚らいてう女史は、**「原始女性は太陽であった」**と言ったのです。

『母系制社会』から『父系制社会』へ

しかし、農耕文化が発達し、私有財産が発生してくると、男性は、苦労して築き上げた財産を、死後、正統な自分の子孫に継承させたいと考えるようになりました。

そこで、父方の血統の純潔が優先されたことにより、女性の自由が拘束され、**『一夫一婦制』**または、**『一夫多婦制』**の父系性社会が形成され、**男性優位社会**が出現したのでした。

これによって、今日に至るまで生まれた子供は父方の性を名乗るという事が一般的になりました。

母系制社会から父系制社会への移行と女性差別の発生は、農耕の発達と機を一にしていたのです。

現代において、夫婦別姓を主張する人たちの理由は色々あるようですが、このように淵源は深いのです。

『国家』の誕生

このようにして私有財産と、それを生み出す生産手段を持った男性優位社会が誕生し、また、男性の中でもより多くの私有財産や生産手段を持つものが権力を持つ身分制度も出来上がりました。国家という究極の権力も誕生しました。

また、私有財産を守ったり、拡大したりするために競争や戦争も行われるようになりました。

『貨幣』の誕生

また、そのころには物々交換も行われていましたが、需要と供給の関係が、必ずしもバランスよく行われるわけではなく、また、鮮度保持の難しい物などもありました。そこで腐敗しにくく誰でもが必要と認め、何にでも交換しやすいものが、基準的役割を果たすようになりました。それが穀物でした。しかし、穀物は持ち運びに不便だったので、次第に、金、銀、銅など軽くて価値の高いものに変わって行きました。

『実体経済』から『信用経済へ』

最初は、交換は等価交換で、実体経済でしたが、資本主義の発達と共に、中央銀行の発行する不換紙幣が用いられるようになり、実体の無い信用経済（株、債券、手形、小切手など）へと移行していきました。

『複利』と『搾取』

また、時間を価値づける利子というものも生まれ、**複利と言う利子が利子を生む仕組み**も出来ました。

そのことによって、不労所得というものも生まれ、持てる者はますます富み、持たざる者はますます貧するという格差社会が拡大する社会システムが出来上がりました。

さらに、資本家は労働力を買い入れて商品を生産するのですが、実際の商品の生産コストよりも安く労働力を買い入れるか、オーバーワークさせることによって、剰余価値（純利益）を生み出し、搾取することも行われ、複利と搾取によって、格差社会はますます拡大していきました。

しかし、どのように私有財産が複雑にバーチャルに発展しようとも、農業が原点である事には変わりないのです。以上のような意味で、**資本主義（複利・搾取）が農業から生まれていること。**

というのは、まさにその通りなのだと解って頂けると思います。

次に

②　農業はあくまで換金作物を生産する産業であり、貨幣や資本主義システムに組み込まれていることをしっかり掘り下げて考える事が大切。

　についてです。現代では、どんなに綺麗ごとを言っていても、お金がなければ生きていくことが出来ません。資本主義とはそのようなシステムの事なのですから……。

　しかし、人の命と健康を守る食べ物を作る仕事が、利潤追求を第一目標に掲げる資本主義システムに組み込まれてしまっては安全を保障することは出来ません。

　どんなに高邁な理想を掲げ、どんなに善意であっても、資本主義システムという土俵の上では、単なる部分的な修正に留まらざるを得ないからです。

　原始共産制社会をユートピアとみなし、私有財産を否定し、社会主義革命を起こした国もありましたが、現実にはユートピアの方向に向かっているようには見えません。

③　逆に言えば、認知革命に基づく農業革命を超克する革命に興味があります。

　それでは、**認知革命に基づく農業革命を超克する革命**とはどういうものなのでしょうか。

　まほろばは、飽くことなく、より多くの利益を追求する資本主義的な拡大再生産のループに乗らない為に『小国寡民』思想を掲げて、３０年間以上も努力を続けてきました。

　しかし、それは出来るだけ小さな資本主義を実現したに過ぎず、逆にグローバル経済の片棒を担いでいるだけでした。

　農業が人類の原罪であると言うのなら、農業以前の原始共産制社会に戻ることが、根本的解決なのでしょうか？

　だからと言って、今さら原始共産制社会（縄文時代）に戻ることは出来ませんし、誰も戻りたいとは思わないのではないでしょうか？

社会主義国家の仕組み

　マルクスは農業を否定せず、コルホーズやソホーズという形で、私有財産を生み出す生産手段である土地を、すべて国有化、公有化しました。国家権力によって管理された過不足の無い生産と消費という計画経済によって、効率的な生産力の発展を実現しようとしました。

　その結果、人々は、多くの自由を奪われ、働く意欲も低下してしまったと言われています。

　社会主義は、資本主義国家に比べ、生産力も低く、今では半ば失敗した体制とみなされています。次第に、生産力の発展のために、飽くことなき個人の欲望を刺激し、利潤追求を第一義とする資本主義的要素を取り入れて行くようになりました。どの体制も、生産力の発展が人々を幸福にするという価値観に縛られているからではないでしょうか？そのような意味では何の違いもありません。

　それでは、私たちはこれから何を目指していけばいいのでしょうか？

次号につづく